

## こころ豊かな社会と環境価値の創造



東北大学大学院環境科学研究科 教授  
廃棄物資源循環学会 会長

吉岡 敏明

Toshiaki Yoshioka

地球規模での温暖化・エネルギー問題、自然環境の劣化や資源の供給リスクといった課題が我々の生活の脅威となっています。持続可能な社会の実現に向けては、低酸素社会、自然共生社会や循環型社会の実現が不可欠であることは、もはや多くの人の共通認識となっていることは言うまでもありません。国内的にも国際的にもこれまで多くの取組みが進められてきましたが、問題解決には未だに大きな壁があると言えましょう。環境に対する価値観や何を社会課題と捉えるかという認識が、人や国、生活環境によって異なっているため、持続可能な地球環境と従来の価値観に基づく“豊かな”人間社会の理想像が分断されていることも大きな要因となっています。例えば地球温暖化問題は、問題の大きさに比べて、対策の在り方や解決の思考が近視眼的になり、経済的・社会的な利害関係の側面からの対策に終始する小ぶりの思考に陥っているのではないのでしょうか。持続可能な地球環境と心豊かな人間社会という理想を統一的に結像させるには、暮らし方や社会の在り方に関する価値観の大変革が必要となります。また、地域で醸成されてきた固有な文化をも強力かつ有効な指標として捉え直し、地球環境と共生できる心豊かな人間生活の基盤となる「新しい環境価値観」創造を中心的な目標として持続可能な社会への確かな道筋が必要となります。そのためには、新たな価値観の創造が必要です。

蓄積された高度な研究や技術成果を社会に役立てるため、提供者や享受者の「知る価値」としてのインターフェース機能を社会に成熟させねばなりません。現状では社会・経済活動の外側にある自然資本が、資源の再生可能性資本として価値評価に組込む仕組みを構築し、かつ人々の認識を変革する必要もあるでしょう。エネルギーにおいても、量的価値、質的価値や時間応答性というこれまでの価値基準に社会受容性という人々の受入れ方に関わる基地基準を加えたエネルギー価値を創生することも必要になってきます。

我々は、研究や技術の成果を社会実装する過程で浮かび上がって来る諸問題を現実的側面と科学に求められる社会的使命の両面から捉え直し、新たな環境価値を求め、それを社会实践として少しでも早く具現化する時期に来てしまったといえましょう。